

『伊勢物語』第二十三段考

A trial interpretation of "Ise Monogatari" chapter 23

久保 朝 孝

KUBO Tomotaka

キーワード：女の意志／準備段落／主題段落／対比段落

一、小論の趣旨

『伊勢物語』第二十三段は、三段落に分けて読まれるのが一般であり、その内容からいってそれはきわめて妥当な態度であると言えるだろう。しかし、学校教科書に採用される場合は、第一段落のみ（いわゆる「筒井筒」の段）あるいは第一段落に続いて第二段落までを範囲とするのが大勢であり、第一段落から第三段落までのすべてを一望することはきわめて稀である。

そのため、学校教科書を離れてこの章段全体を読み通した場合においても、特に第一段落に影響されて、章段としての主題把握が不正確または不十分なものになってしまっているように思われてならないのである。幼な恋の成就に見られる純心、あるいはひたすらに夫を待ち続ける女の真情というあたりに収斂する傾向が否めない。

そこで、本稿ではあらためて各段落を読み込むことによって、第二

十三段の本来の姿を明らかにしてみたい。結論を先に言うなら、本章段は主題を担う中心としての第一段落がまずあり、その後日談として第二段落があり、さらにその後日談として第三段落があるというように、直線的かつ付加的に繋がるものではない。そうではなくて、主題を担うのは実は第二段落であり、その準備として第一段落があり、またその主題を際立たせるための対比物として第三段落があるということなのである。

以下、段落ごとに節を分かち、いささか随筆風に論じてみたい。

なお、本稿中の『伊勢物語』本文の引用は、すべて〈新潮日本古典集成〉『伊勢物語』（渡辺実校注／昭和五十一年九月／新潮社）による。ただし、読解の便宜を考慮し、適宜仮名表記に漢字を当て（三十六カ所三十九字）、これに伴い適宜振り仮名を補った。

二、女の「意志」の力（第一段落）

『伊勢物語』第二十三段の難所の一つは、冒頭部にあらわれる「田舎渡らひしける人」が何者なのかということであろう。今そのことに拘泥するつもりはないが、しかしこの章段を読み解く上でその点をないがしろにするわけにもいかない。そこで、本章段の文脈上無理がない状況を推測することにより、本稿では次のように仮想しておきたい。

それは、都から派遣された地方官員であるとする。ほぼ4年任期で、諸国に現地赴任する下級役人、それが男の親とみる。男は、この親が現地妻との間にもうけた子か。子は女親のもとで養育される。一方、女の親は現地採用の、同じく下級吏員。これは土着している。女たちが集う井戸端の周囲で、その子どもたちが遊び回る状況が、これで想起されるであろう。

むかし、田舎渡らひしける人の子ども、井のもとに出でて遊びけるを、大人になりにければ、男も女も、恥ぢかはしてありけれど、男は、この女をこそ得めと思ふ。女は、この男をと思ひつつ、親の合はすれども聞かでなむありける。さてこの隣の男のもとよりかくなむ。

筒井つの井筒に懸けしまろがたけ

過ぎにけらしな妹見ざるまに

女、返し、

くらべこし振分髪も肩過ぎぬ

君ならずして誰か上ぐべき

など言ひ言ひて、つひに本意のごとく逢ひにけり。

この章段は、『伊勢物語』の多くの章段が冒頭の典型として用いる「むかし、男ありけり。」で開始しない。そこにまず登場させられるのは、「田舎渡らひしける人の子ども」二人であり、そこに男女の差はない。それぞれの男女が成人して互いを意識する様相「恥ぢかはして」「男も女も」と並立されているのであって、性差による優劣は何も見られない。「昔、男」を軸とした数多の恋物語を抱える『伊勢物語』の中では、きわめて特異な章段といってよいだろう。また、男は「この女をこそ得め」と思い、女もまた「この男を（夫トシテ迎エヨウ）」と思い続ける。男女は、対等な関係として語り出されるのである。

人口に膾炙した物語（第一段落）なので、細々とした説明は省略する。

この段落は、幼時から淡い恋心を抱き続けていた男女が、その思いを遂げて結婚に至る清純な恋の物語（幼な恋の成就）として読まれ愛されてきた。しかし、それはいかにも近代的な読み方ではあるまい。この段落の本質はそこにはない。

男の求婚の和歌第二句中の「かけし」については、「欠けし」を当

てるなどの例が見られるが、渡辺実の解釈が至当。よって、私に「懸けし」と当ててみた。

「かけし」は諸説があるが目標にすること。身長が井筒の高さに達する頃には隣の娘と結婚できようと、自分の成長を待っていた末の、求愛の歌。（新潮日本古典集成／頭注）

ともかく、男の和歌は身長という具体物によって自分が成人年齢に達したことを伝え、その資格をもって求婚する内容のものである。それに対して、女の和歌も同様に髪の高さという具体物によりすでに成人年齢に達していたことを伝え、それをもって結婚を許諾する内容となっている。「髪上げ」は女子の成人儀礼であるが、それを執り行うのは父親を含む一族の重鎮または徳望ある貴人とされる。ただし、この場合はそれを求婚してきた男が行うと見なして詠出しているが、それは成人式がそのまま結婚に繋がることを前提にした発想によっている。

相思相愛の男女による、求婚と許諾を内容とする幸福な和歌の贈答という理解。これが落とし穴となる。内容の理解という点においては、これで間違いはない。しかし、その和歌の往復のあり方が尋常ではない。答歌の詠み方が、平安時代における男女の恋の贈答の常識から大きく逸脱しているのである。この点を見逃してはならない。

そもそも男は女への永遠の愛を誓い、女はその求愛を拒みまたは

疑って撥ねつける。簡潔に言うならば、そのような贈答のあり方が当たり前なのである。女は男の求愛を、言葉の世界では受け入れない、これがこの時代の常識なのだ。もちろん女は言葉では拒んでも、答歌を返すことにより、相互の心の交流は果たされるのであるが。

それがこの贈答の場合、女は「君ならずして誰か上ぐべき」（あなた以外に私の結婚相手はいない）と言い切っているのである。この異質性は何に起因するものなのか。

女は、この男をと思ひつつ、親の合はすれども聞かでなむありける。

傍線部、「なむ」「ける」の係り結びを軽視してはなるまい。平安時代の婚姻慣行として、男女の婚姻にはその親が重要な役割をもって介在していた。特に女の婚姻相手の選択については、その親が最終決定権を有していた。そのような状況の中で、女は親の薦める相手を拒み続けているのである。（女の親が、この男を婿候補として見ていないのは、男の立場の不安定または将来性の欠如があっただろうか。）

ともかく、女はこの男をひたすらに慕い、親の意思に逆らい続けるのである。これは、普通にはあり得ない事態なのだ。同時代的に、尋常の女ではないと見なければなるまい。ついに「本意」を実現して、この男女の婚姻が成就するのは、貫徹された二人の純真さのゆえなどではない。一途に相手を思い続ける、実に女の「意志」の強さによるものだったのである。強い「意志」の力を持った女主人公が、ここに

登場させられる。

三、女の「化粧」の意味（第二段落）

さて、幼な恋を成就して婚姻が成立した男女ではあったが、その後女の親が亡くなってしまふ。男は、婿取りされて女の家同居していたとみられる。若い夫婦の経済的支援は女親が行うのが一般とされる。この場合、妻方居住とみられるので、であればなおさらいっそう女の親の死は、二人にとって大きな打撃だった。男の父親は、すでに都に帰還していたのだろう。

そこで男は、経済的収入を求めて、河内国高安郡の品は下るが裕福な家の女のもとに通うことになる。同居する女とは別の訪婚先ができ、二重婚姻状態となるのである。

さて年ごろ経るほどに、女、親なく頼りなくなるままに、もろともにいふかひなくてあらむやはとて、河内の国高安の郡に、行き通ふ所いできにけり。さりけれど、このもとの女、悪しと思へるけしきもなくて出しやりければ、男、異心ありて、かかるにやあらむと思ひうたがひて、前裁の中にかくれるて、河内へ往ぬる顔にて見れば、この女、いとう化粧じて、うちながめて、風吹けば沖つしら浪たつた山

夜半にや君がひとり越ゆらむ

と詠みけるを聞きて、かぎりなくなしと思ひて、河内へも行かずなりにけり。

四

しかしながら「このもとの女」は、夫が別の女のもとへ通うのを不快に思う様子も見せず男を送り出す。男は、それが「異心」すなわち妻が思いを寄せる別の男がいるためかと疑う。そこで、出立を偽装した上で庭の植え込みの中に隠れ、女の様子を窺うのである。

男の目に、女の姿形が捉えられる。

①入念に化粧を施している……他の男を迎えるためか。

②物思いに沈んでいる……他の男を思っているからか。

さらに、その耳に女の口ずさむ言葉が聞こえてくる。

③風が吹くと沖の白浪が立つ（そのように私の心も波立って落ちて着かない）……他の男の訪問を待ちあぐねているのか。

疑心暗鬼に捕らわれきつたその瞬間、女の言葉は「たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ」と結ばれる。女の心は、他の男になど向いていなかった。ひたすらに、男の安否を気遣うその心情に打たれ、「かぎりなくかなし」と思った男は、その後高安の女のもとに通わなくなった。和歌の力によって、離れゆく男の心を回復した物語、いわゆる歌徳説話の一典型といつてよい。

ここで、女はどうして化粧をする必要があったのか。妻のたしなみとして、夫不在の間も化粧を欠かさないという考え方もあろう。渡辺実「ひとりにうちとけぬ心用いは、心を高く保つことで、心の洗練

の一つの姿」(前掲同書)であるという。

それはそれとして、この女の置かれた状況を再考してみたい。女は親の死によって、経済的基盤を失ってしまっているのだ。これは妻として、最大の弱点であるに違いない。二人の生活を維持するために、新たな収入を求めて高安の女のもとへ向かう男を止めることはできないのだ。嫉妬することなど、女には許されていない。

そのような極限状況の中で、ともすれば頼れがちな女的心情を支えるものは何であったのか。それこそが、第一段落中にみた女の「意志」の力であったのだ。ひたすらに夫を思い続けるという「意志」の力。「化粧」はその意志力を増幅するものだった。

そもそも「化粧」とは、何であったか。それは、ありのままの自己を越える理想の姿を現出させる行為であり、あるいは自己ではない他者または人間を越える存在に変化(へんげ)する行為なのだといえよう。その極限は、仮面を被るところに行き着く。

女の「意志」の力は、夫婦間の最大の苦境から彼女を救い出したのだった。第一段落において、女が意志力の強い人物として造型されていた理由は、実にここにあったのである。

四、「対比」される高安の女(第三段落)

しかし、現実問題として収入がなければ生活はできない。そこで、やむなく高安の女のもとへ来てみると、婚姻の当初は男の身分に合わ

せて奥ゆかしくも取り繕ってはいたが、訪婚が定例化するうちについて油断をして、自ら杓文字をとって飯茶碗(筥子)については通説に従う)に盛ってしまった。その姿を見て、男は嫌気がさしてその後この女のもとを訪ねなくなってしまう。

下級官吏の子とはいえ、おそらく商いを生業とするこの女の家とは、日常の生活規範が異なっていたのであろう。この文化の差に男は堪えられない。『伊勢物語』の目指すものがほの見える場面でもある。

男の嫌気に気がつかないということだろう。女は、その後訪問が途絶えた男をひたすらに思い続ける。男を思うという点において、高安の女は大和の女と同趣の存在となる。

まれまれかの高安に来てみれば、はじめこそ心にくくもつくりけれ、今はうちとけて、手づから飯匙とりて、筥子のうつはものに盛りけるを見て、心憂がりて行かずなりにけり。さりければ、かの女、大和のかたを見やりて、

君があたり見つつを居らむ生駒山

雲なかくしそ雨は降るとも

と言ひて見出すに、からうじて「大和人来む」と言へり。よろこびて待つに、たびたび過ぎぬれば、

君来むと言ひし夜ごとに過ぎぬれば

頼まぬものの恋ひつつぞ経る

と言ひけれど、男、すまざるにけり。

高安の女は、男を思い和歌を二首詠むが、特に一首目の和歌は大和の女の和歌との共通点が多く見られる。

① 男からの返歌はない。

② 境界としての山を読み込む。

③ そこにいない男の姿を見ようとする。

④ 自然現象を読み込む（風・浪／雲・雨）。

同時に、相違点もあるわけで、これを見過ごしてはならない。

ア 和歌の形態。

大和の女は独詠。

高安の女は贈歌。

イ それぞれに対する男の反応。

大和の女に対しては、愛情の深化を感じて、高安への訪婚を中止する。

高安の女に対しては、特段の行動が見られない。

ウ そこにいない男との関わり方。

大和の女は、魂が風に乗って龍田山へ向かうがごとく行動的な心理。

高安の女は、生駒山のこちらにあって「見つつを居らむ」と静的な心理。

結局のところ、男の愛情を繋ぎ止めたのは、経済的に不利な状況に

ある大和の女だった。その機微については、今さら触れる必要もあるまい。おそらく、第二十三段は第二段落をもって終止してよかったのである。しかし、この大和の女の特異な有り様を顕在化させるためには、類似する対比物が必要だったということだろう。

そして、第三段落もまた、おそらく「君があたり……」で終始してよかったのだ。しかし、第三段落は男の来訪の可能性を付加する。「大和人来む」は女の周囲の者の言葉でもあろうか。「大和人『来む』」とすると、男の言葉になり、女の和歌「君来むと言ひし夜ごとに」との平仄は合うのだが。それはともかく、男のたび重なる「前渡り」（と言つてよいだろう）という現実を前にして、高安の女はもはや男の来訪は「頼まぬものの」、恋い慕い続けると伝えるのである。無論、男からの返歌はない。

男の愛情を疑う、という女歌の常套から逸脱して、ひたすらに男への愛情を詠み上げるという点において、二人の女は別人ではない。しかし、大和の女はその思いは独詠という形で内向させるのに対し、高安の女は直接に男のもとに届けるのである。しかも、その表現「恋ひつつぞ経る」もまた、いかにも直截に過ぎる。「手づから飯匙とりて、笥子のうつはものに盛りける」行動に重なる、野卑な趣きといつてよいだろう。近代的な感覚からするなら、自らの思いをそのまま相手に伝え、相手の訪問がないにもかかわらず恋い慕い続けるというのだから、いかにもいじらしい一途なかわいい女ということにもなるが、『伊勢物語』はそれを許さないのである。

このような女を登場させることによって、第二段落の女の美質―それはそのまま第二段落のみならず、本章段の主題に繋がる―は、いっそう明瞭に読者に伝えられることになる。「みやび」とは語源的に、都会的に洗練された美意識の謂であり、またそれに基づく言動一般に及ぶ。渡辺実とは、それを「心の洗練」と言い切る。

以上に見てきたように、『伊勢物語』第二十三段には、平安時代に生きる貴族階級女性が理想とすべき「心の姿」が、第一段落の男との掛け合いによって準備され、次に第三段落の女との対比を行うことによって、結局は第二段落に収斂・表現されているのであった。